

自由と平等のアンチノミー

竹 田 青 嗣

9・11 同時多発テロについてのわたしの基本認識は以下のようです。

資本主義の3つの危機

近代の市民社会が生み出した「資本主義」は、その内在的な矛盾によって、20世紀以降、三度大きな危機的状況を生み出しました。

第1が、1929年、ウォール街の株の大暴落に端を発する世界大恐慌。

第2は、第2次大戦以後の東西対立の冷戦構造。

第3が、9・11同時多発テロとその後作り出された世界情勢。

第1の危機の内実は、初期資本主義の基本的な矛盾が露呈したもので、多くの困窮した労働者階層を生み出し、国内的に貧富の格差を異様に拡大させただけでなく、近代ナショナリズム国家どうしの激しい対立競争を生み出し、中進国を追いつけてファシズム化させ、結局、世界戦争にいたりしました。

第2の危機の内実は、矛盾を激発させる資本主義（自由主義）体制に対する対抗モデルとして社会主義国家が成立し、その対立が世界的な緊張を生んだことです。対立は「あれか、これか」という構造をとり、政治的軍事的対立抗争を世界大に拡大し、ほとんどの周辺国家がこれに巻き込まれた。この対立は、結局、社会主義モデルが全体主義化と専制体制化を克服できないことが明らかとなり、社会主義という選択肢は消え、相対的に「自由主義」体制が残ることになりました。

第3の危機の内実は、その結果として現れたものです。社会主義という選択肢は消滅したが、資本主義の矛盾の克服の「可能性の原理」は見いだ

されたわけではない。環境問題・資源問題以上に、南北格差が持続的に拡大してゆく進み行きは動かしがたい現実として、貧しい国の人々の「絶望」をいっそう増大させています。絶望は必然的に救済思想を生み出すが、現在、この絶望を引き受ける最大の受け皿が「イスラム原理主義」になっているわけです。これは誰もが感じていることですが、この資本主義の矛盾の拡大が克服される原理が納得される形で作くり出されないかぎりには、「テロ」は決して収まらず、新しい対立構造は反復されるほかありません。

「正当化される資本主義」への変革

一般人を巻き込む救済思想の「テロ」は、自己の世界像の「正しさ」への強固な信念から、これに同じない他者は殺してもよいという共同的な絶対倫理を根拠としているので、思想的にはまったく「正当化」されえません。にもかかわらず、それは「絶望」の「世界心情」（加藤典洋）としては“理解”されえます。「私の生」の可能性が何者かによって奪い取られていると強く信じている人間は、その他者を殺す権利をもつと考えるからです。少なくとも、テロを実行する組織の末端の人間はそのような正しさの「信念」に駆られており、また資本主義の矛盾の現実がその信念のリアリティーを支えていると言えます。

現代、この「テロ」攻撃とそれへの実力による断固たる対抗措置に対して、アメリカの覇権主義批判と反戦（非戦）主義という2つの声が強くなっています。冷戦後のアメリカの独り勝ちの情勢と、戦火にさらされてそれを避ける手立てももたない当事国の人々のことを考えれば、それもま

た「世界心情」としては理解することができます。しかし、現在の「テロ状況」が上述のような世界の情勢の構造的所産であるかぎり、これらの主張は「可能性の原理」とは言えず、むしろ問題を見えにくくしています。これらの主張は、われわれが反アメリカの立場（つまり、反資本主義的立場）を強く打ち出し、反戦思想を強く推し進めれば、世界から資本主義の矛盾や戦争がなくなってゆくというイメージをつくり出していますが、残念ながらそれらはややロマンチックで空想的な考えというほかありません。

現在の資本主義の矛盾を克服する原理は、単に「反資本主義」を言うだけでは決して出てこず、戦争を減じる原理も「反戦=非戦」という思想からは決して出てこない。これらの声は、一部ではかつての左翼的な対抗資本主義の論理と混ざり合っており、情勢便乗的な反資本主義の主張を出ないものです。

わたしの考えでは、現在の資本主義の矛盾を克服する上で最も重要な問題は、現在の資本主義を「正当化」されうる資本主義へと変革できるかどうかということであって、資本主義の完全な破棄という考え方は、もはや出口を持たない不可能な思想になっているということです。もう1つは、「戦争」という事態をなくしていくための本質的な条件は、よりフェアな市民主義的国家間ルールをいかに成立させていくことができるか、ということです。この2つのことについて、もう少し踏み込んでみます。

近代の基本原理「自由の相互承認」

ニーチェはギリシャ悲劇における「悲劇」の概念を、生の本質は苦悩であるにもかかわらず生を是認し引き受ける態度、ととらえました。ヘーゲルは『精神現象学』で「悲劇」についてさらに本質的な考えを示しています。たとえばソフォクレスの悲劇「アンチゴネー」が示すのは「国家の掟」と「家族の掟」の相剋という事態だが、ギリシャ世界ではこの相剋を調停し克服する原理が存在しなかった。そのためこの相剋は人間にとって超えがたい「運命」となり、それは「悲劇」を構成す

る。そこで人間は悲劇を演じるほかに生き方がないと。

この考えで言うと、たとえばヨーロッパの宗教戦争は、宗教の倫理には、異なった宗派どうしの人間が共存しうる原理がなかったために生じたものです。カトリックもプロテスタントもおびただしい議論を重ねたが、そこからは宗教戦争を克服する原理は現れなかった。その原理は、近代哲学がつくり出したのです。「絶望の世界心情」から生じる「テロ」と、それへの実力による反撃との相剋も同様で、いまのところこれを調停する「原理」はどこからも提示されていない。反資本主義や反戦の声はその原理にならないわけです。

上にみたような「絶望の世界心情」は、「テロ」という手段での反資本主義的対抗を不可避のものとして生み出していますが、この世界心情は、潜在的にテロの対象となりうる資本主義先進国の人々さえも一種のシンパシー（同情）を感じざるをえない側面も持っている。現在の資本主義の大きな矛盾は先進国の人間も感じているものであり、また資本主義が自らそれを克服する力をもたないということも一般的に直観されているからです。

ここから、ヨーロッパの現代思想は、多く「反=資本主義」およびそれを支えるものとしての「反=国民国家」の思想を、ポスト=マルクス主義思想として、積極的に生み出してきました。そして非ヨーロッパ先進国の知識人は、ほぼ例外なくこのヨーロッパ出自の反資本主義思想にそのままなっている。それはしばしば、反=ヨーロッパ、反=近代、反=市民社会的構想、また非ヨーロッパ的なものの可能性、という諸形態をとっています。重要なのは、それらは現行の「資本主義」の本質を、ヨーロッパの近代市民社会原理と1つのものとみなし、その全体を批判すべきものとみなしているという点です。しかし、ここには重要な錯誤があります。

一般的な考えでは、資本主義は近代の自由経済のシステムを土台としています。自由経済=自由競争という社会システムのあるところ資本主義は必然的であると考えられています。ある意味ではその通りです。そこでマルクスは、この「自由競

争」と「私的所有」を徹底的に禁止するルールをつくり出すことによってのみ、資本主義の矛盾は超えられると考えた。しかしこの考えには根本的な誤りがありました。この問題の核心を「自由と平等のアンチノミー（二律背反）」という概念で示すことができます。

「近代社会」（市民社会を基礎とする）の根本理念は「自由の相互承認」（竹田）という概念で示されます。これはロック、ルソー、カントが鍛え上げ、最後にヘーゲルが仕上げをした近代社会の基本原則です（これについては、『群像』2002年9月号の「資本主義・国家・倫理」で詳述している）。

「自由」は「平等」を約束しない

古代専制帝国ではただ1人の人間（帝王）だけが自由な存在たりうると言われますが、ヨーロッパの旧体制でも、現実的な意味で自由な存在たりえたのはごく一部の特権階級だけでした。万人が「自由」であるためには、つまり各人が生き方の自己決定を行いつつ生きる社会をつくり出すためには、2つの根本的な条件が必要だった。1つは、万人がルール権限において平等である市民国家という政治社会のシステム。もう1つは、財の普遍交換にもとづく自由競争という経済システムです。この普遍交換・普遍市場のシステムだけが、各人の生活を不特定多数の他者に依存させ、そのことで各人の「自由＝自己決定」を現実化するわけです。

さて、近代社会の構想は、この市民社会原理は、各人の「自由」を確保することによって、人間どうしの漸次的「平等」もまた自ずと実現されるはずだというものでした。各人の自由の実現は、これまでのような支配構造を不可能にするので、それは当然、労働によって作り出される財や富の不均等な配分を終わらせるはずだと想定されたからです。しかしそうはいかなかった。近代社会の自由競争という経済システムは「資本主義」を生み出した。これはつまり、各人が「自由」であるにもかかわらず富の配分の異様な不均衡を生み出し、そのことで別種の「支配構造」をつくり出すようなシステムだったわけです。

こう考えると、社会主義の資本主義克服の構想

は、ちょうどこれと逆の形をとっていることがわかります。それはさきに述べたような形で「平等」を可能にするシステムを構想しました。レーニンの想定では、もし強力な政治ルールによってはじめに「平等」を実現してしまえば支配構造の根拠は消滅するから、そこで自ずと万人の「自由」も実現するだろうというものでした。少数者による多数者の支配が不必要なところでは政治権力自体が不要なものとなり、したがって国家は徐々に死滅するだろう、と彼は書いています。しかし、これが原理的に不可能な構想だったことは歴史的に明らかです。したがって、重要なのは、「自由」の確保を核とする近代社会理念をべつの理想理念で代替することではなく、本来、各人の妥当な「自由」と「平等」を実現してゆく原理であった近代社会理念が、なぜ現在のような矛盾にみちた資本主義システムとなっているのかを考察することです。

「自由」の理念は、しばしば、他人を搾取して儲けるだけの「自由」とか、「支配したりされたりする自由」といった言い方で、つねにその欺瞞を言い立てられてきました。しかしそのような批判は、この理念の本質を考えれば、皮相なものであることがわかります。「自由」の理念の核心は、単に自己中心性を解放することではもちろんありません。人間を共同体的な属辞（～という固定的役割関係であること）から解放し、多様な表現する人格どうしの関係として社会関係をつくり出すこと、そのことで、何らかの超越的な（＝聖なる）権威からではなく、ただフェアな人間関係だけから人間の人間の価値をたえずつくり出し、つくり替えるようにすること、そのような関係存在へと人間の存在をつくり替えることにあります。このことのためには、まず人間の自己中心性を解放することが必須の条件だった。「自由の相互承認」、つまり自己中心性の相互承認は、自由な人間どうしがフェアなルールの中で本質的な関係をつくり出すための前提条件です。そして、この人間の自由な本質関係が、また各人が他者の「自由」を深く理解するための前提なのです。

われわれはしばしば、近代社会の「自由」の理

念を自由競争の原理に直結し、それをまた現在の資本主義の矛盾に等号で結びます。そこから、反資本主義→近代の自由理念への疑念→近代国家、近代市民社会への批判という系列の社会批判を反復してきました。しかし、もはや問題なのは、いかに現行の資本主義の矛盾を克明に指摘するかということではありません。最も重要なのは、近代の市民社会原理から、「万人が自由であるにもかかわらず極端な経済的支配構造を可能にするシステム」としての「資本主義」の側面（これを狭義の「資本主義」と呼びたい）を切り離し、「自由」の理念を確保しつつ、現行の資本主義の矛盾を克服するための根拠と条件を構想することなのです。

資本主義の正当性の根拠

さて、わたしはここで、1996年に出た見田宗介の『現代社会の理論』が、上述したような本質的な課題をはじめて自覚的な形で提出した仕事であり、歴史的な重要性をもっていたことに注意を喚起したいと思います。そこでは近代社会の「自由」の原理を人間の生活の本質条件として認めそれを前提とした上で、狭義の「資本主義」の矛盾を克服する原理が模索されており、またそのことが思想的に必要であることが明確に自覚されています。ここでの見田氏の中心的な主張は、大量消費→大量廃棄という現在の資本主義システムの循環に代わりうるプランとしての、情報としての財、という発想にあります。人間の欲望の無限性は資源や財貨の無限消費を必然化するという一般的な通念を、生のエロスをつくり出すものとしての情報という概念で刷新しようとするものです。哲学的にも1つの根本概念が提出されており、きわめて本質的な議論であると思います。

見田氏のこのような議論に触発されて、わたし自身もまた、この間、「近代哲学再考」（『国際学研究』第20号、2001年3月）、『言語的思考へ—脱構築と現象学』（径書房、2001年）、「資本主義・国家・倫理」（『群像』2002年8月号）などで、この展望の上に立つ論考を書き進めてきました。ただ、わたしが力点を置くのは、近代社会の基本原則からもう一度資本主義システムの根拠を考え

直すという作業です。これをわたしは、「資本主義＝自由経済システムの正当性」の根拠という言葉で呼びたいと思います。

この考えを十分に展開することはもちろんできないので、必要なことを2点述べて、この話のまとめとしたいと思います。

近代社会を正当化するもの

まず、資本主義＝自由経済システムの「正当性」という概念についてです。たとえばルソーは『社会契約論』の冒頭でつぎのように書きました。人間は自由な存在として生まれた。にもかかわらず、いたるところで鉄鎖に繋がれている。なぜこのようなことになってしまったか直ちには言えない。しかしいったい何がこのような政治支配を可能としたのか、あるいは、どのような政治支配ならば正当化されるのか、そういった問題についてであれば、自分にははっきりした原理をもっている、と。

この考えは大変独自です。彼は『社会契約論』では、もう初期の『人間不平等論』や『学問芸術論』での反社会的ロマン主義から脱しており、政治支配、統治権力というもの自体を矛盾に満ちたものとして非難する立場に立ちません。政治的社会というものが人間にとって必要であることを認めた上で、いったいどのような政体＝政治権力ならば万人がそれを「正当」なものとするのか。そういう「正当性」の原理を取り出せるだろうか。そういう考えをとっている。そして、彼は2つの原理を明確に取り出しています。まず、その政治社会が、成員全員が互いに他を自由な存在と認めて対等な権限で作り出したものであるという相互の想定。これが「社会契約」の概念です。もう1つは、政治統治と政治権力は、成員の特殊意志でも、共同意志（全体意志）でもなく「一般意志」を代表する限りで「正当化」されるということ。これが「一般意志」の概念です。

このルソーの考えは、現在大いに誤解されていますが、しかし哲学的にはいまなお「近代社会」の最も土台をなす原理と言えます。近代社会の根本原理は、人間は現実には能力、力量、資質といっ

たさまざまな差異があるが、しかしこれを誰もが対等な権限をもった個人とみなして社会を営むこと、という考え方にあります。この考えだけが近代社会を「正当化」するものであり、また逆に、この考えがあらゆる「社会批判」の本質的な根拠になるのです。一見単純すぎるように見えますが、少し考えつめるとこの相互承認の原理以外には、われわれの現在の社会感覚、ルール感覚を基礎づけるものはないことがわかります。

わたしの考えでは、資本主義の本質的批判もまた、資本主義＝自由経済の「正当性」の概念によってのみ根拠づけられる。つまりわれわれは、どのような自由競争、どのような資本主義ならば、自由な成員の総体がこれを「正当」なものとして認めるシステムであるのか、という観点をとることができるし、またそのような観点以外に、いまのところ資本主義を本質的に批判しうる根拠はないのです（他の選択肢は、「絶対平等」か「最も弱い者の立場」といったものですが、これはもう何度も実験済みの古い無効となった理念です）。

「可能性の原理」を構想すべきとき

第2の点はここからの帰結です。ルソーの考えを「正当化される市民社会的政治統治の原則」という言葉で要約できるとすれば、われわれが直面しているのは「正当化される資本主義＝自由経済システムの原則」という問題です。つまり、前者は政治システムの正当性の原則の問題、後者は経済システム（競争と所有のありかた）の正当性の問題です。これに対するわたしの暫定的な考えは「ルール社会原則」という概念で示されます。

「近代国家」の本質は、もともと「各人の幸福」（ヘーゲル）ということが国家の存立の最高目的であるという点にあります。そしてその基礎は、各人が互いに他を「尊厳をもった自由な存在」として承認しあうという前提です。この意味で近代社会の理念は、「普遍的なエロスゲーム」（各人がフェアなルールのもとに——他者の自由を侵害しないという限定において——自由に自分の「幸福」を追求することができる社会）という性格をもちます。そして自由経済というシステムは、この近

代社会の本質的理念に基づいてはじめてその正当性をもちうるわけです。

いま比喩的に言えば、現在の資本主義システムは、その成員を自由なルール権限をもった普遍的エロスゲームのプレーヤーであるとして、多くのプレーヤーがそのゲームを基本理念から見て不当なものと感じるようなシステムとなっている。ごく一部のものだけが、特権的にまた固定的に成功しつづけ、大多数が負け続けるようなゲームになっている。で、多くの人間は、それをどこか不合理であり、不当なものであると感じている。現行の資本主義ゲームの「正当性」に疑義の念をもっている。しかしわれわれはそれを明確に（原理として）表現することができないため、この不当感を、絶対平等や絶対他者といった不可能な理念で代行させているのです。

ルソーにならえばこうなります。人間の自然な本性にもとづく万人の「自由」と「平等」の実現を目指した近代社会の構想がなぜこのような巨大な経済支配の構造に帰着したのか、直ちには言えない。しかし、どのような原則ならばこの自由経済のシステムは正当化しうるのか、その原理についてはおそらくこれを確定しうるはずだと。

わたしのとりあえずの結論は、哲学・思想の枢要の課題は、人間社会の矛盾を克服する「可能性の原理」を構想する点にあるということです。これは現在、緊急を要するかもしれない具体的な諸問題に対しては概して無力に見えます。しかし、現代資本主義の本質的矛盾を克服する「可能性の原理」がわずかなりとも示されないかぎり、「絶望の世界心情」は、「自由を享受する先進諸国」対「救済思想によるテロ」という悪循環を果てしなく生み出します。資本主義の矛盾を克服する原理は、単なる反=資本主義からは出てこない。これは「自由と平等のアンチノミー」を解くことができないからです。むしろ資本主義の土台となった近代の自由な政治・経済システムの根本理念に立ち戻ることではじめて現在の資本主義の矛盾を克服する根拠を見いだすことができる。それがわたしの考えです。ここでは十分にその論拠を示すことができませんでした。しかし、そのような

「可能性の原理」の構想こそ重要であり、いままさしく、さまざまな思想がそのような構想を競い

合い、鍛え合うべき時期に来ていると考えます。